長尾城の曲輪・土塁・空堀 (平成19年5月撮影)



曲輪(廓)の一つ。長尾城は大小 10 以上の曲輪がありました。



土塁。長尾城の土塁は高さが 60 センチ程度の物から 2 メートルぐらいの物まであり、曲輪を一部囲む形で築かれています。この土塁は比較的低い方です。



この土塁は2メートル近くあります。



左の土塁の上に立ち撮った写真です。曲輪から土塁を 乗り越えた反対側は、崖や堀などになっている場合が多 いようでした



本丸東側にある空堀です。4~5 メートルほどの深さがあります。



左の写真の空堀を北側へ少し下った所です。堀の右側 (西)が本丸です。

長尾城の名宮神社跡・眺望 (平成19年5月撮影)



本丸あとの小高い丘の上に有る若宮神社跡です。

右より詞跡・手水鉢?(手水鉢の周囲にも碑文が書かれていました)・石塔(目的・意味・由来不明、碑文が書かれていましたが詳しくは分かりませんでした)



若宮神社の祠です。屋根が外された状態でありました。祠の側面と背面に碑文が有りましたが苔むしていて、今回は読めませんでした。写真右上に山の神が小さく写っています。



長尾城から見た清掃工場



祠の後ろにあった 山の神の石碑で す。高さが30セン チほどの小さな物 でした。



長尾城西の丸から見た敷根。肉眼ではもう少しきれいに見 えましたが、写真では春霞ですこしかすんで見えます。 (9)

長尾城の大手口地・名宮神社祠の纹 (平成19年5月撮影)



長尾城(敷根城)大手口地

西城の西側のすぐ下にある大手口と思われる場所。

自然石の配置をうまく利用し、それに加えて人工的に切り 通しを作り長尾城の正面の進入路とした跡がよく残ってい ます。



幅が2メートル以上ある大手口、切り通し。

この場に行くまで大手門と思っていましたが、昔調査した 資料をよく見ると大手門ではなく、大手口地となっている ことをあわせて考えると、門柱などは無くとも門の用を足していたのでは?と思う大手口地です。





五七の桐

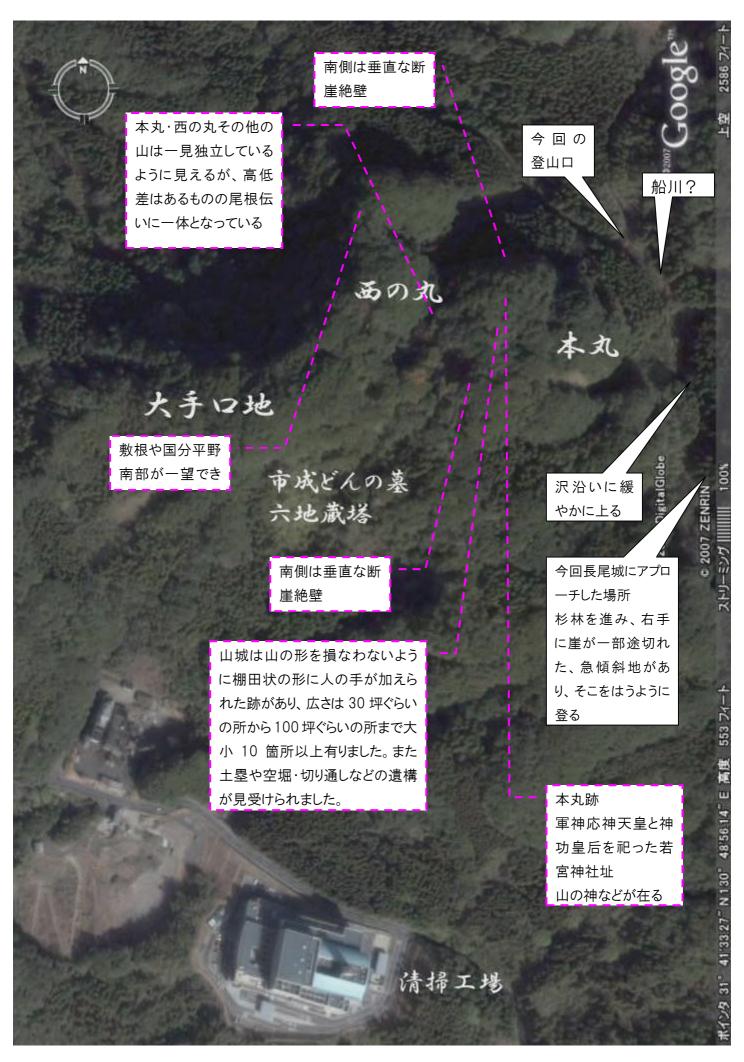


五三の桐

左の写真は、若宮神社跡の祠に刻まれた桐の紋様。桐の紋様には「五三の桐」と「五七の桐」があって、左の写真は、おそらく『五七の桐』だろうと思います

桐の紋はもともと天皇の御衣に描かれた「桐・竹・鳳凰」のデザインの一つが鎌倉時代末期ごろまでに皇室の紋章として定着した物で、時代が移り、良く仕えた将軍家・臣下などに天皇より桐紋が下賜されるなどしました。足利氏や織田氏や豊臣家などもこの紋の使用を許されていました。この下賜された桐紋を将軍家などが後に、功績のあった家臣へ贈られたことで武家社会へも広まったようです。500 円硬貨の裏面も桐がデザインされ、五七の桐は日本政府の印としてパスポートや政府の記者会見の際使われる演台などにもあしらわれています。

若宮神社の紋の由来は良く分かりません。



平成 19 年 4 月 30 日、5 月 2 日·長尾城(敷根城)調査登山

長尾城(敷根城)の城主、土岐氏

ときしろうざえもんのじょうくにふさ

土岐氏は、平安時代末期の元暦元年(1184年)に土岐四郎左衛衝国房という人が敷根の地にきて領主にときけんたろうよりふさなり、その子の土岐賢太郎頼房が長尾城に拠ったそうです。国房が敷根に来たのが 1184 年ですから、長尾城は 21 世紀(2007年)の現在まで、築城よりざっと 800 年の歴史があることになり、敷根氏が長尾城を居城としたのは頼房の時代(平安時代末期)から 14 代後の頼賀(安土桃山時代)まで約 400 年間です。

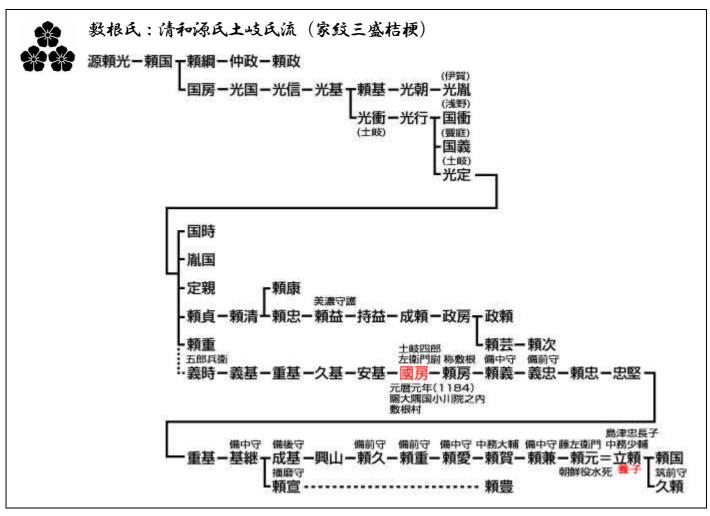
土岐氏 (家纹:桔梗)

ときしろうざえもんのじょうくにふさ

清和天皇(850年~880年・在位858年~868年:源氏の祖)の末流で、土岐四郎左衛衝国房よ

り十四代前の源頼光の子・源 頼 国(生年未詳~1058 年?)の子孫(国房・光国・光信・光衝のいずれか:光衝が 有力)が美濃国土岐郡に土着して土岐氏を称したのが始まり。

一門には、明智光秀や国取り物語で有名な斉藤道三に国を取られる美濃土岐氏などがある。



敷根氏が治めた約 400 年間このあたりは豪族が群立し興亡を極めたが時勢をよく見極め小国ながらも所領を全うした。また、頼賀の時代、長尾城は強大な勢力を誇る肝付氏・嶋津氏双方の勢力が拮抗する境にあり天文十七年(1548 年)に嶋津方についていた敷根氏は長尾城を拠点に 20 数年にわたり肝付氏よりその境界を守りとおした。

西暦	年 号	敷 根 氏(土岐氏)年 表	比較年表
		清和天皇の流れをくむ清和源氏・源頼光(摂津源氏)の末流 美濃・尾張・伊勢地方の出身・・・?	源頼光=天暦二年(948)~治安 元年7月19日(1021·8·29) 大江山酒飲童子·土蜘蛛などで有
		大版 代派 [产为地力]] :	名
1184	元暦元年	土岐四郎左衛門國房が大隈國小川院之内敷根村を賜る	1185 年 屋島の合戦・壇ノ浦の合戦 平家滅亡
		土岐四郎左衛門國房の子、土岐賢太郎頼房が敷根氏と名乗り長尾城に拠る	
1213	建仁二年		島津家初代:嶋津忠久(惟宗忠
			久1180~1227)が薩摩の国守護
			職に任ぜられる。(忠久は自身は 鎌倉にあって代官・本田親恒を置く)
1221	承久三年		しょっただいさ 嶋津忠久が越前の国守護職に補 任される。
1456	康正 2	3 月 24 日・伊東氏祐、北原貴兼と兵を合わせ、大隅廻・敷根・上井に侵攻する。島津忠国、これを撃退し、伊東・北原連合軍退く。(西藩野史)	LC1000
		戦国時代には小領主反島津の行動をとったり、上井氏や廻 氏などと小村(現:広瀬)などを焼き払ったり、工井氏や廻 につとめたようだ。	
1548	天文 17 年	14代・敷根中務大輔頼賀の時代には廻氏・上井氏と共に嶋津貴久に降りる。	
1549	天文 18年		イエズス会宣教師フラソシスコ= ザビエル, 鹿児島に上陸、(キリスト 教の伝来)。
		肝付氏が敷根口に攻め入った(嶋津攻めの)際、長尾城でこれを防いだ。	
		嶋津貴久の蒲生攻めに従軍する。	
1575	天正三年	頼賀は嶋津義久より日ごろの忠誠を賞して重富の春華と帖 佐の益田を賜り千石を加増される。	
	天承五年	野尻城城代の福永丹波守の伊東氏から嶋津方への寝返りにより伊東氏敗退後、島津家家臣敷根頼豊が野尻城城主になる。	
1592	文禄元年	16代・敷根藤漸衛門頼元、文禄の役に出陣し帰国途中水死	秀吉、朝鮮への侵略開始(文禄の 役 1592~1593)
1594	文禄三年	文禄検地が行われ、敷根の一部(脇元)が石田三成の知行 分となる。	·
1595	文禄四年	類質は垂水の下大隈田上城へ移封され、家族・家臣をつれ 長尾城より田上城へ移った。	
1599	慶長四年	17代・敷根中務少輔立頼(嶋津家一門の嶋津忠長の実子、	

		敷根藤漸衛門頼元に男子が無かったため嶋津家より養子に 入る)の時代、高隈へ転封され垂野城を居城とした。	
1600			関が原の戦い 1603 年江戸幕府開幕
1604	慶長 19 年	高隈に代わり曾於郡市成(現:輝北町)を拝領した。	
		18代・敷根筑前守頼善(久頼)は島津家の娘と結婚した。	
1616	慶長 20 年	嶋津光久が後光天皇の即位の慶賀に参上した際、頼善は嶋津姓と久の名を拝領し 18 代、敷根嶋津筑前守久頼と称し、嶋津家の一門の敷根嶋津家となる。この頃より市成殿とよばれる。	
1617	元和三年	伊佐郡大口郷の地頭となる。	
1650	慶安二年	敷根筑前守久頼が嶋津家・家老となる。	
1786	天明六年	敷根氏23代嶋津仁十郎久芳が、長尾城本丸南側に荒れ果 てたままになっていた祖先の墓を麓にまとめ六地蔵塔(市成 どんの墓)を立て供養した。	1783年イギリスがアメリカの独立を承認

MEMO